

儀礼継承の構造：熊本県南阿蘇のヒガンゴモリに関するフィールド・ノートから

片山, 隆裕
九州大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/2235371>

出版情報：九州人類学会報. 15, pp.16-24, 1987-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



儀 礼 継 承 の 構 造

——熊本県南阿蘇のヒガンゴモリに関するフィールド・ノートから⁽¹⁾——

片 山 隆 裕

1. はじめに
2. 調査地の概況
3. ヒガンゴモリ儀礼の諸相
4. 儀礼継承の構造
5. おわりに

1. は じ め に

「ヒガンゴモリ」という用語の説明を「総合日本民俗語彙」に求めると、「彼岸籠り。九州の阿蘇地方で春秋の彼岸に必ず登山をすること。コモリは地方によってはただ単に祭りの意にも使われるが、ここではその前後の物忌が守られたものと思う」⁽²⁾とある。熊本県阿蘇地方の多くのムラで行われていたこの民俗慣行は、今日では全く行われなくなってしまうたり、たとえ行われているにしても期間の縮小や儀礼の形式・内容の簡略化などを経験してきている。ただ彼岸に登山をする慣行はみられなくなったとはいっても、今日でも阿蘇地方には、特に秋彼岸に一週間続けて「オコモリ」という一般的名称で呼ばれる儀礼を行っているムラ⁽³⁾が存在しているのも事実である。では、何故多くのムラで行われなくなった「ヒガンゴモリ」が、形式・内容の変化はあるにせよ幾つかのムラでは継承されてきているのだろうか。

小論では、現在熊本県南阿蘇地方で行われている「ヒガンゴモリ」儀礼の諸相を4つの事例を提示しながら記述し、儀礼の持つ特質を明らかにするとともに、儀礼が継承されてきた要因について若干の考察を試みることにする。

2. 調査地の概況⁽⁴⁾

熊本県阿蘇地方は、五岳を挟んで北側の阿蘇谷と南側の南郷谷に二分される。小論で取り上げるのは、南郷谷の南端に位置し、東西13キロ、南北4.5キロの孤状の形をした農山村、久木野村である。久木野村は、標高1000—1200メートルの南部外輪山分水嶺より白川へ降下した傾斜地にある。「肥後国誌」によると、藩政時代には西から下久木野村、中久木野村、上久木野村に分かれており、手永庄屋制度の下これらは布田手永に属し、また現在の二子石地区は二子石村として高森手永に属していたという。⁽⁵⁾明治4年の廃藩置県に伴い、白川県第11大区第10小区となったが、その後明治22年の町村制度実施により久木野村となり、西部の河陰、東部の久石という2つの大字に分けられ現在に至っている。

昭和61年4月1日現在の人口は、652世帯2,626人であり、南郷谷4カ町村の中では最も規模の小さい行政村である。久木野村は現在9つの駐在区から成っており、それぞれに区長が置かれている。

各駐在区は、2ないし6の小部落を含んでおり、この小部落が小論で取り扱うヒガンゴモリの実行圏となっている。表1にみられるように、小部落の規模は10世帯程度のものから70世帯程度のものまで多様である。規模の小さな小部落は、通常それ自体が独自に小組合として機能しているが、中規模以上の小部落は複数の小組合から構成されているのが普通である。

表1 小部落ごとの世帯数と人口

村	大字	駐在区	小部落	世帯数	男 性	女 性	計
久木	久石	1	上二子石 中二子石	36 16	71 40	71 32	142 72
		2	井手口 原尻	37 21	75 43	81 44	156 87
		3	御陳・桑原 新村 平素 平原	13 18 20 15	24 25 42 29	25 32 40 31	49 57 82 60
		4	栗焼 田崎 中尾 小牧 井手下 麦原	14 8 9 20 10 21	25 16 13 42 15 40	36 17 9 45 12 50	61 33 22 87 27 90
	野河陰	5	上猶須 下猶須	57 38	111 80	115 86	226 166
		6	中原 観音寺 室町	12 11 20	38 20 41	25 18 40	63 38 81
		7	柿野 山田 摺野	36 15 33	78 35 54	80 39 68	158 74 122
		8	岸野 堀渡	72 33	150 72	164 65	314 137
		9	前川 八里木 見瀬 柏野	18 20 19 10	32 35 30 16	29 36 28 16	61 71 58 32
	合 計			652	1,292	1,334	2,626

24年に約8割を占めていた専業農家率が、昭和60年には約2割へと著しい低下を示していることである。また、村では約700頭前後いる和牛飼養を中心とする畜産や、3500ヘクタール余を有する森林による林業も行われている。昭和61年7月には、南部外輪山の中腹に「大規模年金保養基地・グリーンピア南阿蘇」がオープンしたことに示されるように、観光開発や諸機関の誘致にも力を入れ始めている。

村内には、二子石日吉神社、原尻神社、上久木野神社、久木野神社の4つの村社があり、それぞれ80、25、130、300戸の氏子を抱えている。⁽⁶⁾また曹洞宗の清水寺、真宗の了光寺や江善寺などの仏教寺院も、人々の信仰生活の依り拠となっているが、村自体が東西に13キロと細長いので、隣接する高森町、白水村、長陽村にある社寺との関わりをそれぞれに持っている部落もある。さらに、村のあちこちには観音堂、阿弥陀堂、妙見社など数多くの小祠があり、それぞれ小部落を単位とした年中行事の際に祭祀の対象と成っている場合が多い。

3. ヒガンゴモリ儀礼の諸相

久木野村には今日でも、秋彼岸になるとヒガンゴモリ儀礼を一週間続けて行っている部落がある。筆者は昭和61年の秋に、中二子石、堀渡、見瀬、八里木という4つの小部落で、これを観察する機会に恵まれた。ここでは、その前後に行った若干の聞きとり調査によって得られた情報で補足しながら、南阿蘇のヒガンゴモリの諸側面について簡単に延べてみたいと思う。

■ 中二子石

部落の中央に鎮座する妙見社の拝殿（公民館）⁽⁷⁾に、毎日2戸ずつ当番の主婦がマワシ（交代）で詰め、参拝に来る人々を接待している。当番の家は「妙見サンノ茶ワカシ」と呼ばれるが、そのマワシ始めは、部落を二分している葬式組（東組と西組）を単位として、東組と西組から1年交代とされている。当番の主婦たちは午前11時頃から日暮れ頃まで詰め、それぞれに準備した1升のご飯と煮しめなどを参拝者に振舞う。妙見神社の拝殿（公民館）にやってきた当番の主婦たちは、まず1升飯を大きな容器ごと妙見神社の神殿に供えて拝む。供えられたこの1升飯は「オボクサン」と称される。オボクサンには白米が使用されるが、これは湯飲みに盛って参拝者に出され、必ずお湯をかけて食べることとされている。部落の老人たちによると、自分たちが子どものときには白米が貴重だったので、もっと食べたいと思っても小さい湯飲みに1杯だけしかもらえなかったという。今ではおかわりも何杯でも自由である。小学生や保育園の子どもたちは、煮しめにはあまり箸をつけず、オボクサンだけを競っておかわりをして食べる。主婦たちが持ち寄った煮しめも妙見神社に供えられるが、その品数は奇数が良いとされている。筆者の観察では毎日大体11品であり、その殆どは部落の各家で穫れるものでまかなわれている。

一週間行われるヒガンゴモリに先立って、18日には「妙見さん祭り」が行われる。これは、部落の繁栄や部落民の無病息災を祈願するために行われるもので、隣村の白水村にある八坂神社（通称祇園さん）から神主を呼んでいる。このとき部落の男たちの手によってなわれた締め縄が妙見社の拝殿（公民館）の前に張られ、組世話人の手でオミキアゲがなされる。

20日からいよいよヒガンゴモリが始まるわけだが、この日は朝9時頃から部落内の村道脇の草を刈るノミチヅクリ、妙見社の池を掃除するイケサライなどが行われる。これらの作業には各家から男た

ちが出るものとされているが、実際には半数が女性であった。作業が終わる11時頃から部落の人々は拝殿（公民館）に集まる。組世話人が、妙見社、妙見社の池、そして以前は妙見社の神殿に合祀されていた天神さんの祠に御神酒を供えオミキアゲをする。午後になって三々五々訪れる参拝者の殆どは中二子石の人々であるが、隣接する小部落である上二子石や井手口からと訪れる人もある。参拝者は、子どもたちの場合男女を問わずよく訪れているが、中学生以上になると女性のほうがかなり多い。⁽⁸⁾ 拝殿（公民館）では様々な世間話に花が咲くことになるが、日没時になり部落の人々が大方訪れ終わると、当番の主婦たちはそれぞれの家に引き揚げる。秋彼岸の一週間の間毎日このプロセスが繰り返されるが、中日と最終のケチガン（結願）には夜に公民館で宴会が開かれる。

■ 堀 渡

部落の北寄りに堀渡観音と呼ばれる観音堂があり、ここで一週間のヒガンゴモリが行われる。この観音様は子ども好きで、子どものことをお願いすると御利益があると信じられており、これを部落の人たちは「観音さんの前では子どもがどんなにあばれたり危険な遊びをしても、絶対に怪我をしない」とか「観音さんの前で子どもを叱ると叱った大人のほうが病気になる（腹が痛くなる）」という語りで表現する。ここではいわゆる御堂に籠るので「堂ゴモリ」と呼ばれているが、春彼岸には一日だけ、秋彼岸には一週間 籠っている。部落の33戸は上組（19戸）と下組（14戸）に分かれており、この2つの小組合が隔年で当番を務めている。当番の割り振りは、毎年新年の寄合いの際に決められる祭組の主宰者が管轄するとされているが、実際には担当する小組合の人々全員で決めている。昭和61年には下組が当番であり、毎日2戸ずつ主婦たちが朝7時頃から夕刻まで観音堂に詰めていた。主婦たちは、各自持ち寄ったオボクサン、御神酒、赤飯、煮しめなどを観音様に供えた後、これらを訪れた参拝者に振舞う。中二子石の場合と違って、このオボクサンは小さいにぎり飯である。戦前には任意ではあるが、特に願をかけたい人々は、夜具を持ち込んで御堂に籠り夜を明かしていたという。参拝に訪れる人々は殆どが堀渡部落の人であるが、同じ第八駐在区の岸野部落から訪れる人もある。中日には第八駐在区（岸野と堀渡）の体育大会が行われるが、この日堀渡部落ではその打ち上げを兼ねて夕方から盛大な宴会が観音堂の前で開かれる。カラオケ大会を中心としたこの宴会は、秋彼岸の堂ゴモリの中でも最も盛り上がる場あり、人々は口々に「部落民の強固な結束」を強調する。最終日である26日はやはりケチガンと呼ばれ、この日にも夕刻より宴会が開かれるが、中日ほどの盛り上がりはみられない。ヒガンゴモリが行われるこの期間、この部落に特徴的なものは中日の「腹願立て」とケチガンの「腹願ほどき」である。腹願立ての日と腹願ほどきの日に、部落民各自が腹の病気をしないように願をかけて観音堂に参ると、腹に関係する病気にはかからないという。これは江戸時代に疫病が流行した際、部落の人たちがこの観音様に祈願したところ、疫病が収まったという伝承に由来するとされている。またここでは戦前に、任意ではあるが彼岸に阿蘇登山をしていたといわれるが、戦後は全く行われなくなったという。

■ 見 瀬

久木野村の西端の第9駐在区は4つの小部落から構成されているが、そのうち見瀬、八里木の両部落で、秋彼岸に一週間のヒガンゴモリが行われている。見瀬部落には、柏野谷川の西に荒神さんの祠堂がある。この祠堂は神殿と集会所を兼ねた拝殿とから成り、ヒガンゴモリはこの拝殿で行われる。荒神さんの祠堂には、猿田彦神、天照大神が併祀されているが部落の守護神が荒神であることは、こ

の部落を単位として行われる年中行事がヒガンゴモリと10月28日の「荒神さん祭り」であることから推察できる。

秋彼岸の一週間の各日の当番はくじで割り当てる。部落の戸数が17となので、初日（彼岸の入り）、中日、最終日（ケチガン）にはそれぞれ3戸が、それ以外の日には2戸ずつ、やはり各家の主婦たちが務めている。くじで決められた当番は原則として「荒神さんが決めたことなので、都合が悪くても文句を言ってはいけない」とされているが、現実には相互に交代する場合もあるという。この部落の場合、当番の主婦たちは一日中荒神さんの祠堂に籠っているわけではなく、朝7時頃、正午頃、午後3時頃に神殿の3つの神体にそれぞれ小さい茶わん1杯の白米のご飯、御神酒、お茶、煮しめ、焼酎、日本酒などを供えに行く。このご飯はここではゴクサンと称され、ゴクサンや煮しめを供えに行く行為は「お茶を上げに行く」と称される。参拝に訪れるのは殆ど部落の人である。早い人は午後4時過ぎにやってくるが、現在では農業以外の職を持っている人が多いので、皆が集まるのは普通夜の7時過ぎであるという。参拝に訪れた部落の人たちはやはり世間話に花を咲かせる。この部落では、土用の入りの日に無病息災を祈願して行った「御願立て」が終わるのが、彼岸の入りの「御願ほどき」の日である。以前は、この日には部落の全員で総ゴモリを行っていたが現在では当番の家が2、3軒程度寄るだけであるという。

■ 八里木

この部落には聖徳太子を祀る御堂があり集会所を兼ねているが、ヒガンゴモリはこの聖徳太子で行われる。彼岸の入りの20日と最終日の26日は4人、それ以外の日には3人の主婦たちが当番として籠るが、中日には総ゴモリと言って部落の全員が参集することになっている。当番はウケマエと呼ばれ、寄り合いの際に婦人会の幹部のイニシアチブの下で割り当てられる。ウケマエは、白米のご飯、煮しめ、赤飯、万十、巻きずしなどを持ち寄り、聖徳太子に供える。主婦たちは通常昼頃から籠り、夕方5:00頃までをこの御堂で過ごす。終戦頃までは、隣接する柏野部落にある阿弥陀堂で堂ゴモリをしていた。しかし、昭和35年八里木組が柏野組から分離した際、昭和9年から小さい祠に安置されていた聖徳太子を八里木の人々の心の依り拠とし、また集会の場をつくることも目的として、昭和37年3月に現在の御堂が完成した。このとき、八里木婦人会が発起人となり岸野や当の八里木から浄財を募ったのである。昭和35年までは同じ講組を組織していた柏野には、今でも阿弥陀堂はあるが戸数がわずか10戸となり今では堂ゴモリはしなくなった。八里木では聖徳太子堂にウケマエが籠るが、部落の人々は参拝にやっては来ないという。中日に行われる総ゴモリの際にのみ、部落の各家が500円ずつ出し合い昼頃からお茶を飲み世間話をする。戦前に柏野の堂ゴモリに行っていたとはいうものの、八里木のヒガンゴモリの場合、昭和30年代半ば以降新しい形式と内容を備えて登場したものである。

4. 儀礼継承の構造

以上述べてきた南阿蘇の久木野村におけるヒガンゴモリの特性を簡単にまとめてみると表2のようになる。祭祀の対象、籠る時刻、歴史などにおいては多様性がみられたが、一方では儀礼の内容や意味についての類似性もみてとることができる。近隣の多くの村あるいは部落で、戦前には一週間続けで行われていたヒガンゴモリが、中日のみにしか行われなかったり、あるいは全く行われなくなっているという状況にあって、今日でも秋彼岸の一週間の間ヒガンゴモリが行われている理由としては、

表2 4つの部落におけるヒガンゴモリの特性比較

項目 \ 部落名	中 二 子 石	堀 渡	見 瀬	八 里 木
世帯数(戸)	15	33	17	20
人 口(人)	75	137	58	71
名 称	オコモリ 妙見サンノ茶沸シ	堂ゴモリ	オコモリ 彼岸守	オコモリ 太子守
祭 祀 対 象	中二子石妙見社	堀渡観音	見瀬荒神	聖徳太子
歴 史	江戸時代以降	江戸時代以降	不詳	昭和36年以降
当 番	中高年の主婦	中高年の主婦	中高年の主婦	中高年の主婦
供 物	オボクサン 煮しめ 御神酒 その他	オボクサン 煮しめ 御神酒 赤飯 その他	ゴクサン 煮しめ 御神酒 赤飯 その他	ゴクサン 煮しめ 御神酒 赤飯 その他
コモル時刻	11:00 頃から 夕刻	7:00頃から 夕刻	一日3度 (7:00、正午 15:00)	正午頃から 夕刻
主たる参拝者	部落民	部落民	部落民	部落民
儀礼の意味	妙見社への感謝、 無病息災と部落繁 栄の祈願、娯楽	堀渡観音への 感謝、腹の病 気の予防祈願 娯楽	荒神への感謝 病気の予防祈 願、娯楽	聖徳太子の守 護、娯楽

「昔からやっているから」、「部落民がなかよくするため」というような説明がなされる。しかしながら、このような主観的な説明以外にも客観的な説明原理として考えられる要因の幾つかを提示することができると思われる。ここではヒガンゴモリのもつ「強化儀礼」としての構造的特質を示し、その特質とヒガンゴモリの行われている部落のもつ特性を関連させながら、若干の考察を試みてみたいと思う。

■ 儀礼の構造的特質

稲刈りを控えた比較的閑暇な時期に行われるヒガンゴモリは、その全てが各部落内にある宗教的存在を統合のシンボルとして行われる宗教的・娯楽的行事であり、宗教的存在と人々との直接間接の交流・交換の場である。そこではオボクサンや御神酒などを供え、これを一般の参拝者に振舞う輪番制の主婦たちが重要な役割を担っている。どの部落もそれぞれの宗教的存在と直接のコミュニケーションを図るのは通常中高年以上の主婦たちであり、家に中高年の主婦がいる場合、若い嫁が当番を務めることは稀である。一般の参拝者となるそのほかの部落民は、当番の主婦たちを介して宗教的存在とのコミュニケーションを図ることができる。その際、供えられたオボクサンや御神酒あるいは煮しめは、いわゆるカミと人との象徴的共食物として機能している。ここには、神人共食をその中心

に据えた折口信夫の祭り認識⁽⁹⁾の表現様式が見られるのである。

儀礼参加者の殆どは部落の人々である。隣接する部落からも参拝に訪れる人があるが、この場合もヒガンゴモリが行われている部落の人々のネットワークを媒介にしているものが殆どである。他の部落の人々に尋ねても、4つの部落で秋彼岸に行われるヒガンゴモリの儀礼内容を知らないばかりか、そのような行事が行われていることすら知らない人が殆どであった。しかし逆に、儀礼を行っているそれぞれの部落においては、ヒガンゴモリは年中行事の中でも最も重要な儀礼として認識されている。儀礼に対する部落の人々の主観的認識は「オコモリ（堂ゴモリ）をする部落のほうがかまどまりがある」、「部落民の仲がいいので、こうして皆まとまってオコモリをしているし、けんかなども殆ど起きない」という語りに表れる。また、社会交換論的に一般交換とみなされる当番の輪番制というシステムは、人々の平等性を前提としており⁽¹⁰⁾、儀礼を実行することで、この平等性が確認される。このように、ヒガンゴモリは部落民の結束を再確認しこれを維持・強化する機能を果たすという「強化儀礼」⁽¹¹⁾としての特質を強く備えているといえることができる。

■ 村落の構造的特質

ヒガンゴモリ強化儀礼としての特質をもっているとすれば、今日でもこの儀礼を一週間続けて行っている部落には、部落の結束を再確認しこれを維持・強化しなければならなかったなんらかの構造的特質が存在すると思われる。ここでは、儀礼の継承を必要としてきた部落が、ある程度共通して持っている構造的特質について述べてみたいと思う。

まず第一に、ヒガンゴモリ儀礼が行われるためには、祭祀対象としての宗教的存在が必要である。中二子石、堀瀬、見瀬、八里木の4部落における祭祀対象は、それぞれ妙見社、観音堂、荒神堂、聖徳太子堂と多様であるが、これらには共通点も見出すことができる。それは、祭祀対象の小規模性であり、それが必ず当該部落の守護神としての性格を持つということである。祭祀対象といっても小論の2章で記述した4つの村社や仏教寺院など祭祀圏が小部落の範囲を越えるものはこの儀礼における統合のシンボルとはなっておらず、ここにヒガンゴモリが小部落を単位としてその部落の結束を再確認し、維持・強化するという強化儀礼としての特質をもっていることの一端を窺い知ることができる。

ヒガンゴモリが継承されてきている部落の第2の特質として、部落の規模を挙げることが出来るだろう。4つの部落の戸数をみると、それぞれ15戸、33戸、20戸、17戸という具合に、久木野村にある28の小部落の中でも比較的中小規模の部落であることがわかる。どの程度の規模の部落が最も強い結束性を持ち得るかということを明確に例証することは困難であるが、それでも部落の規模が大き過ぎると儀礼継承についての部落全世帯のコンセンサスが得られにくく、また逆に規模が10戸程度あるいはそれ以下の部落では、祭祀対象の有無に関わらず儀礼自体の実行が困難であることは容易に推察できる。

第3に、ヒガンゴモリが継承されてきた部落のもつ規模以外の周縁的性格についての言及が必要となるだろう。ここでいう周縁的性格の内容に関しては部落ごとにバリエーションが存在するが、それはいずれも隣接する他の部落との相対的關係においてもつ周縁性として位置づけることのできるものである。中二子石や堀渡はそれぞれ上二子石、岸野という規模の大きい小部落とともにひとつの駐在区を形成しているが、村内の諸活動の多くの側面においてこれらの部落に押されがちである。そのことは例えば、昭和60年に中二子石公民館ができる前には、駐在区の話し合いの折にはわざわざ隣の上

二子石にまで出向かなければならなかったという事実や、岸野からは3人の村会議員が出ているのに対して、堀渡からは1人しか出ていないなどという形で表現される。第9駐在区として村の西端に位置する見瀬や八里木などについては、その地理的環境の不敏さが語られる。久木野村には小・中学校が各1校しかないが、スクールバスが通う以前にはこれらの部落の子どもたちは8キロの道のりを歩いて通学していたという。また同じ駐在区の柏野部落が従来地主が多い部落であるのに対して、そこから昭和35年に分かれた八里木は、小作の多い部落であるという意味での相対的な周縁性を部落の人たちは認識している。ヒガンゴモリが、このような隣接部落に対する相対的な周縁性を補償する機能を持つ儀礼として認識されていることは、人々が異口同音に発する「自分たちの部落は小さいが、まとまりがあるのでオコモリ（堂ゴモリ）をやっているが、あそこの（隣接する相対的に規模の大きい）部落はこんな（いい）行事はやっていない」という一節に表現されるのである。

最後に、ヒガンゴモリが長年にわたって継承されるには、儀礼を行う人々の側にも連続性がなければならない。ここでいう連続性とは、人々が自分たちの住む部落にずっと留まっていること、すなわち社会移動が少ないことを意味している。4つの部落では、いずれも1～2戸の例外を除いては戦後約40年の間社会移動による部落構成世帯の変化がなく、小部落としての結束性がはかり易かったことも看過できない要因と思われる。堀渡の場合は、他の3つの部落より部落の規模がやや大きいにも関わらず結束が可能であったのは、部落の半数以上の世帯が古沢姓を名のることに示されるように、同族部落としての同質性と時間的連続性を兼ね備えていたからと考えられる。

5. おわりに

小論で筆者は、民俗儀礼が消滅あるいは縮小化の方向をたどる過程にあって、一方では今日まで儀礼を継承してきた部落が存在していることに着目し、儀礼それ自体と儀礼を継承してきた部落のもつ構造的特質を明らかにしてきた。小論で取り上げた熊本県南阿蘇の久木野村にある4つの部落のヒガンゴモリ儀礼は、いずれも部落の結束を再確認し、これを維持・強化する機能をもつ「強化儀礼」としての特質を備えていた。そして、ヒガンゴモリのもつこの「強化儀式」としての特質が、儀礼が継承されてきたこれらの部落のもつ構造的特質と関連していることを示唆することができた。4つの部落において「強化儀礼」としてのヒガンゴモリが継承されてきたのは、

- (1) 部落内に祭祀対象としての宗教的存在があり、これを統合のシンボルとして部落の結束が図られ易いこと。
- (2) 部落の規模が、それほど大きくないこと。
- (3) 儀礼を継承してきた部落が、隣接する部落との相対的關係において周縁的性格を有すること。
- (4) 社会移動が少なく、儀礼の継承が容易に行いうること。

などの特質が存在していたからであるということができる。小論で取り上げた4つの部落に限って言えば、これらの特質を全て満たしていることが、儀礼が長年に渡って継承されてきた必要条件と考えられるのである（図参照）。

小論で述べてきたヒガンゴモリ儀礼の構造は、あくまでも一つの村落社会における数少ない事例を通しての考察にすぎない。ここで提示した考察結果をもとにしてより高次の妥当性を導くためには、久木野村以外における事例の収集に加えて、以前行われていたヒガンゴモリが行われなくなった部落

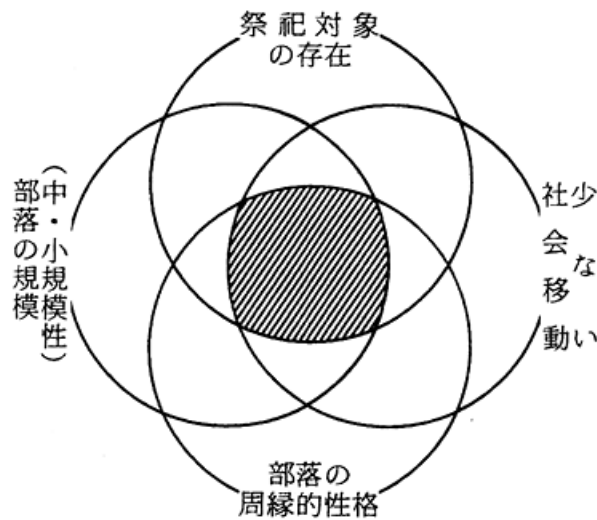


図 ヒガンゴモリ儀礼継承の条件

における儀礼の消滅あるいは簡略化の過程を解明することが必要となってくると思われる。

註

- (1) 小論は、昭和61年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A「女性の民俗に関する実証的研究」）による助成を受けて 昭和61年8月、9月及び昭和62年1月に、熊本県阿蘇郡久木野村において行った現地調査の資料に基づいている。調査に際しては大変多くの方々にお世話になった。誌上を借りて感謝し申し上げる次第である。
- (2) 民俗学研究所（編）『改訂 総合日本民俗語彙』 第3巻 平凡社 1970年 1294ページ
- (3) この場合、ムラとは「一定の領域を基礎にして成立している社会組織の基本単位」（福田アジオ『日本村落の民俗的構造』 弘文堂 1982年 82ページ）であるが、ここでは第2章以下の「小部落」あるいは「村落」という用語と同じ意味で用いている。
- (4) 調査地の概況に関する記述は、主として『村勢要覧 くぎの』（久木野村役場）及び『熊本県勢要覧』（熊本県統計調査課）による。
- (5) 後藤是山（編）『肥後国誌 下』（南部事蹟考）青潮社 1971年
- (6) 上米良純臣（編）『熊本県神社誌』 青潮社 1981年 191ページ
- (7) 中二子石のオコモリは、昭和59年までは妙見社の拝殿に籠っていたが、昭和60年にそれまで拝殿があった所に公民館が建てられたため、この年から公民館に籠るようになった。
- (8) 儀礼参加者の属性を通してみたヒガンゴモリの微視的分析については、拙稿「“通過儀礼”としてのオコモリー南阿蘇・中二子石ムラの事例から」（九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要 第38号 1987年3月）を参照されたい。
- (9) 折口信夫 「祭りの話」『折口信夫全集』 第15巻 中央公論社 1955年 272-273ページ
- (10) 伊藤幹治 『宴と日本文化ー比較民俗学的アプローチ』 中公新書 1984年 109-110ページ
- (11) Chapple, E. D. & Coon, C. S. *Principles of Anthropology*. Jonathan Cape, Thirty Before Square, London, 1947.